2018/8/19

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　　「**空の空。すべては空」**

聖書箇所：伝道者の書1:2-3

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　新改訳聖書で「伝道者の書」と言われている文書は口語訳聖書では「伝道の書」、共同訳では「コヘレトの言葉」となっています。「コヘレト」というのはヘブル語で「集会者」「説教者」「伝道者」の意味を持つ言葉です。ヘブル語聖書では「kohe:ret」、ギリシャ語訳聖書では「Ekklēsiastēs」であり、この言葉も「集会者」の意味で、ラテン語、英語の聖書でも同じ言葉です。「集会者」と「伝道者」は同様の意味、と推測されます。1:1に「エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば」とあり、1:12に「伝道者である私は、エルサレムでイスラエルの王であった。」とあるため、ダビデの子、イスラエル王国最後の王となったソロモンが著者と言い伝えられてきました。これは、知恵者として有名であったソロモンを著者に擬したのであって、歴史的事実とは考えられていません。BC250-150頃エジプトのアレキサンドリアで書かれたのではないか、という説が有力です。BC323年アレキサンダー大王の死後、イスラエルはエジプトの緩い支配下におかれましたが、その後、勢力をつけてきたシリヤからの圧力が強まっていきます。エズラ、ネヘミヤの指導下で再建されたエルサレム神殿の近傍ではユダヤ教が守られていましたが、そこ以外のイスラエルの地ではヤハウェ―信仰は地に落ちた状況であった、と推測されます。文化的・宗教的にはエジプト、シリアのギリシャ文化、貿易立国として力をつけてきたフェニキア、更にはアレキサンダー大王が好んだペルシャ文明などからの影響が考えられます。また、BC5cに起こった仏教を国教とするマウリヤ朝が栄えていたことも注意に値します。政治的・文化的に流動的時代であったと想像されます。

　この「伝道者の書」はヘブル語聖書では「諸書」の一つとされています。諸書には「ヨブ記」「箴言」「ルツ記」「雅歌」「エステル記」など、イスラエルの正統派神学から外れていると見做される文書が多数入っています。「伝道者の書」もその一つであり、一見すると、全能の主なる神への信仰は失われ、この世の出来事がすべてむなしく、厭世論を語る者の言葉のように思われます。“神の律法の遵守により祝福が与えられ、地上においても豊かな生活が保証される。逆に律法を破ると、主なる神から罰が下され、苦難の道を歩まざるをえなくなる”というのが正統派神学の基本的考え方です。申命記神学です。この考え方は行為帰趨連関と称せられる時もあります。仏教流にいえば因果応報です。「伝道者の書」の特徴は本日の聖書箇所1:2-3にあります。「空の空。伝道者は言う。 空の空。すべては空。/日の下で、どんなに労苦しても、 それが人に何の益になろう。」と言われています。訳し方は多様ですが、“この世の一切は無意味であり、すべての苦労は何の益にもならない”と言っています。

「空」と訳されている言葉はヘブル語では「hebel」ですが、「空」「無益」「空虚」「無意味」「無」「不条理」「皮肉」「神秘」「謎」など、極めて多様に訳されています。神学校の時の指導教官であった小友先生は日本における「伝道者の書」の大家ですが、「儚（はかな）い」と訳すのがこの文書においては最適である、と言っています。青春は短い、というように時間的短さに強調点があるから、という理由です。新改訳聖書はこの1:2では「空」と訳していますが、その他の箇所ではほとんどがひらかなで「むなしい」と訳しています。この文書の最後のところの12:8で「空の空。伝道者は言う。すべては空。」と言われていますが、これは1:2と「枠構造」をなしているため、同じ訳にしているにすぎません。新共同訳はすべて「空しい」と訳しています。こちらは、漢字の「空」を使用した「空しい」です。新改訳の1:2、12:8での「空」の訳は、ここだけ、文語訳、口語訳の伝統を踏襲したことによるものと考えられます。従って、今は、「空しい」が「hebel」の訳として最も一般的と言って良いと思います。英語訳では伝統的には「vanity」（から）と訳されてきましたが、NIVは「meaningless」（無意味）と訳しています。この単語のそもそもの意味は一瞬の「息」「風」のことです。旧約聖書全体では73回使用されていますがNIVに基づくコンコルダンスによると「無意味」と訳されるのが一番多く34回、次いではぐっと少なくなり「無価値な偶像」「息」「むなしい」「無価値」「不正直」等となります。全体的に考えれば、「むなしい」「儚い」「無価値な」というような訳が妥当な訳だと思います。

　では「空」という訳はどこから来たのでしょうか。確かにこの「hebel」も「から」「empty」の意味もありますので「空」という訳も間違っているとは言えないにしても、日本語で「空」といえば仏教用語としての言葉を連想するのは当然のことです。翻訳者もそれを意識して「空」と訳したのに違いありません。では「空」という言葉はどこからきているのでしょうか。これは梵語の「shu:n-nyata:」であり「ふくれあがってうつろなこと」が元の意味で転じて「ない」「欠けた」の意味を持つようになったと言われています。英語では「nothing」です。インドはゼロの発見で有名ですが、この意味もあります。インドの古来の思想における中心的概念の一つです。「実体がない」ということです。これを「空」と訳したのはかの三蔵法師です。そしてこれが大乗仏教の経典である「般若心経」に取り入れられ、日本でもこれが普及するようになったわけです。「般若心経」の「色即是空、空即是色」は有名です。ちなみに「般若心経」最も普及しているのは日本であり韓国など他の国ではさほどでもない、と言われています。ではインドの「空」の概念がヘブル語の「hebel」に影響を与えた可能性はあるのでしょうか。それを主張する学者もいますが、かなり無理があるように思われます。仏教における「空」の考え方はそれはそれとして極めて興味深い考え方ですし、日本の文化に与えた影響から見て重要なことですが、「伝道者の書」との関連性を主張するのはとってつけたことのような気がしてなりません。「hebel」の含蓄としてある「meaninngless、無意味」の意味は「空」から引き出すことはできない、ように思われます。「空」は「なにもない」ことで「意味」などを考える余地もない「まっさら」な境地です。それでは、「hebel」の来たるところはどこか、という点についてはその他、エジプト、フェニキア、メソポタミア、イランなどの説がありますが決定打はありません。旧約聖書におけるカナンの地の民の信仰はそもそもフェニキアの方のウガリットからのものだ、ということを考えると、フェニキア起源かもしれません。結局のところは、わからない、としか言いようがありません。

「伝道者の書」における「空」「むなしい」「儚い」「無意味」などの訳の中で、「無意味」という訳が著者の心を表している、という意味では最も適切なのではないかと思います。本来の、イスラエルの神信仰においては個人は特別な意味を持って居ませんでした。個人はイスラエルの宗教共同体の一員としてのみ意味を持っていたのです。そのため、「死」についても、一信仰者はイスラエルに繋がる者として葬られることによって永遠に生きる者とされたのです。従って、死者が死後どのような世界にいくのかは問題とされず、イスラエルの民としてこの地上の世界に存在し続けることができる、ということです。死後の世界と言う考え方はイスラエルの伝統的考え方からは外れているのです。ユダヤ教においてはあの世とこの世の分裂はなく、この二つが一つになったこの世だけが問題とされる理由もこの信仰共同体思想にあります。しかし、イスラエルの民が離散し、信仰共同体としての実体が見えなくなってくると、選ばれた民イスラエルに対する神の祝福に対する疑問がでてきます。また、信仰共同体としての祝福が無くても、個人としての祝福は期待できるのか、という問題も出てきます。そして、復活の問題など出てくるのです。「伝道者の書」の書かれた時期は政治的・社会的にはもはやヤハウェ―信仰共同体としての復興は期待できない時期であり、伝統的な共同体としての信仰には強い懐疑が向けられた時です。個人としての信仰姿勢に関してはまだ成熟していない時期です。そうすると、かつて、神と共同体の関係の中で意味づけられていた、この世での出来事が何の意味があるのかわからなくなってくるのです。個人としての神の救済はまだ考えられない時期です。この「伝道者の書」ではその状況が「helel」で表されているのです。従って、この世での出来事の意味づけができなくなっている、といういみで「無意味」になっている、ということです。この世での出来事を信仰共同体への神の計画の一つとして意味づけられなくなっているのです。意味が見いだせないため「むなしく」「儚く」「空虚」なことが起きている、という理解しかできなくなっている、ということです。

「むなしい」「はかない」と訳されている言葉にはこの「hebel」以外に「sha:we:」と言う言葉があります。この言葉は旧約聖書で53回も使われており、その多くは「偽り」「真実でない」の意味で使用されています。例をあげますとエゼキエル書12:24「もう、むなしい幻も、へつらいの占いもことごとく、イスラエルの家からなくなるからだ。」の「むなしい幻」のところで使われています。無意味な幻というより真実でない幻という意味です。「hebel」とはかなり違う意味です。「伝道者の書」における、神信仰を放棄するような「無意味だ」というという表現ではありません。逆に「伝道者の書」ではこの「sha:we:」は使われていません。真実の神信仰か、そうではないか、の意味を問うことを停止した態度である、ということです。ゼカリア書10:2には「テラフィムはつまらないことをしゃべり、 占い師は偽りを見、 夢見る者はむなしいことを語り、 むなしい慰めを与えた。 それゆえ、人々は羊のようにさまよい、 羊飼いがいないので悩む。」とありますが、「むなしいことを語り」の「むなしい」は「sha:we:」であり、「むなしい慰め」の「むなしい」は「hebel」です。訳しなおすと「テラフィムはつまらないことをしゃべり、 占い師は偽りを見、 夢見る者は真実でないことを語り、 無意味な慰めを与えた。 それゆえ、人々は羊のようにさまよい、 羊飼いがいないので悩む。」となり、若干意味がはっきりしてくるように思います。

更に、「むなしい」と訳されている箇所として、創世記1:2があります。新改訳では「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。」とあります。口語訳では「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。」と訳されており、「地は形なく、むなしく」の「むなしく」があります。これはヘブル語で「to:hu:」という言葉です。世界創造の最初のところであり、まだ無の状態にあったことをこのように表現しています。この言葉は旧約聖書全体でも3回しか使われておらず、あとはイザヤ書で2回使われているだけです。イザヤ書34:11では「ペリカンと針ねずみがそこをわがものとし、 みみずくと烏がそこに住む。 主はその上に虚空の測りなわを張り、 虚無のおもりを下げられる。」の「虚空の」の部分がこの「to:hu:」です。更には、この節で「虚無の」と訳されているのはヘブル語で「bo:hu:」という言葉です。口語訳・創世記1:2で「形なく」と訳され新改訳では「何もなかった」と訳されている部分です。これも旧約聖書全体で3回しか使われていません。この「to:hu:」「bo:hu:」が日本語訳の「空」に最も近い意味を持つ言葉だとおもいます。創造以前の状態を示す言葉であり、この世を超越していると言うか、包んでいるというか、そのような言葉です。もしインド思想の影響と言うのであれば、「伝道者の書」より創世記1:2にその可能性を見る方が良いのではないか、と思います。

新約聖書における「むなしい」に行くために、旧約聖書のギリシャ語訳・七十人訳において「hebel」のギリシャ語訳をみると、ほとんどが「mataiote:s」というギリシャ語になっています。この派生語も含め、新約聖書でこのギリシャ語を使用している箇所をみると、12回登場しています。パウロの手紙での使用例が多いのですが、それ以外では使徒の働き14:15「あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。」の「むなしいことを捨てて」の ところで使用されています。 ルステラにおけるパウロの説教の箇所ですが、ゼウス神殿の祭司がパウロの奇跡をみて「いけにえ」を奉げようとしたのに対しパウロが言った言葉です。おそらく「無意味な」という言葉に置き代えることができる言葉でしょう。またローマ書8:20では「それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。」と言われており、ここで「被造物が虚無に服し」の「虚無」が「mataiote:s」の原語「mataios」 が使用されています。「被造物が無意味な偶像に服した」と訳しなおすことができますので、やはり、旧約聖書ギリシャ語訳の「mataiote:s」と同様「無意味な」という意味と理解できます。ちなみに新約聖書のヘブル語訳では「hebel」が使われており、「無意味な」の意味で理解することの傍証となっています。また、ギリシャ語の「mataiote:s」の関連語、ヘブル語では「hebel」のところを更にみると第一テモテ1:6があげられます。「ある人たちはこの目当てを見失い、わき道にそれて無益な議論に走り」と言われている「無益」の箇所です。「無意味な」に置き代えても不自然さはありません。こうやって見てくると、新約時代にあっても「hebel」の言葉は旧約の時代とほぼ同様な意味で使用されていたものと考えられます。しかし、使用されるのは宗教的・哲学的表現においてであって、日常的な世界における「無意味」という使い方はなくなっているように思われます。

以上から、「hebel」は旧新約時代を通して、宗教的・哲学的意味での「無意味」を指す言葉として生き続けていた、と言えましょう。旧約聖書のなかでこの「hebel」が使用されているのは73回中38回が「伝道者の書」です。「伝道者の書」以前の文書でこの「hebel」を使用している文書をみると、申命記、列王記では「無価値な偶像」の意味においてのみ使用されています。その後、の文書ではエレミヤ書で8回使用され、その半分くらいが「無価値な偶像」、半分くらいが「無意味な」に置き代えられる使用方法です。そうすると「hebel」の「無意味」「意味が見いだせない」の意味での使用はエレミヤ書で当初使用され、その伝統が「伝道者の書」の「不安の時代」に多用され、その後、新約の時代に至るまで、元の意味を保持し続けていた言葉、と言えるように思います。

では、「伝道者の書」はこの世のすべてを「無意味」と切り捨て、絶望のなかで生きざるを得ない、ということを述べているのでしょうか。また黙示文学と言われる文書のように彼岸の国にのみ望みをつなぐ態度をとっているのでしょうか。そうではありません。“この世は「むなしい」「儚（はかな）い」ことばかりだが、それでもこの現実を肯定し、「死」を迎えるまで、この世で生きていこう”と決意している文書です。わずかの所にでも喜びを、希望を見出していこう、としている様が想像できます。いくつか例示します。2:4-6「私は事業を拡張し、邸宅を建て、ぶどう畑を設け、/ 庭と園を造り、そこにあらゆる種類の果樹を植えた。/木の茂った森を潤すために池も造った。」に始まり2.11「しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。」で締めくくられています。「無意味だ」「益になることはない」とは言ってもこの始めた事業に対する未練が余韻として残っています。

5:1「神の宮へ行くときは、自分の足に気をつけよ。近寄って聞くことは、愚かな者がいけにえをささげるのにまさる。彼らは自分たちが悪を行っていることを知らないからだ。」で始まり、5:7「夢が多くなると、 むなしいことばも多くなる。 ただ、神を恐れよ。」で締めくくられ、神信仰に執着している様が見て取れます。

8:6「 すべての営みには時とさばきがある。人に降りかかるわざわいが多いからだ。」に始まり、8:15「 私は快楽を賛美する。日の下では、食べて、飲んで、楽しむよりほかに、人にとって良いことはない。これは、日の下で、神が人に与える一生の間に、その労苦に添えてくださるものだ。」で締めくくられています。「私は快楽を賛美する」と斜に構えたようなことを言っておきながら、無理してでも「神の祝福」を心底期待している態度が見られます。

11:9-10「若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。だから、あなたの心から悲しみを除き、あなたの肉体から痛みを取り去れ。若さも、青春も、むなしいからだ。」と快楽主義的なことを言っていますが、「神の裁き」を忘れるな、と言います。これを意識しては、刹那的享楽に身を委ねることはできません。

最後の章の12:1-2「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。太陽と光、月と星が暗くなり、雨の後にまた雨雲がおおう前に。」と言われては、通常の信仰書とみまがう感想さえもちます。

このように、この文書は、この世を儚（はかな）んでいるにとどまるのではなく、そのなかでも短い人生をなんとか有意味に過ごせないものか、という心情を吐露しているのです。現代の人間が考えることと変わりありません。この世界は不条理だらけで希望も持てない時代ではあるけれども、その中でも有意味な人生を送る手立てはないものか、と将来の不安のなかで考えている同胞たちをみるものです。

最後にもう一点、指摘しておきます。それはイスラエル信仰のそもそもは「この世」と「あの世」の区別はなくすべて「この世」でのこととして考える、と言う点です。これは善悪二元論や神と悪魔の対立として世界を考える二元論の考えを拒否する、ということと関連があります。このことは新約聖書においても同様です。すべて「この世」のこととして考えるから「肉を伴った復活」が重要なのです。肉体と言っても「霊の肉」と称され、今の我々のからだと同一ではないのですが、この世で霊のからだを持った方として主が生きていらっしゃることが決定的重要性をもつのです。「伝道者の書」でも「儚い人生を終えた死後の世界に望みを託するようなことはしていません。いくら儚い人生であってもこの世の生のなかで喜びを見出そうとしています。ある意味ではしつこｋ、この世に執着した態度です。あきらめない態度である、とも言えます。このような態度は根底には神への信頼が横たわっているから可能なのです。最後のところは死後を神に委ねる姿勢は持ちながらも「この世」に希望をもちつづけ、苦闘することを持って良し、とするのです。この点は新約の時代においても同様です。神の国と不条理なこの世は二重写しのような関係にあるものと考えられます。神の国はこの世と隔絶された別世界のことではありません。ある意味では、「ここにきている」とも言えるのです。主イエスのメッセージも「あなた達は死後の事は神におまかせして、この世で精いっぱい生きて有意味な生涯を送りなさい。」とおっしゃられているように思います。祈ります。

（ご在天の御神様、今日のこの祈りの時を感謝いたします。今日は、「伝道者の書」からメッセージを戴きました。「空の空」の言葉だけをみると、この世を嘆きすべての望みを失った者のように思えますが、よく読むと、イスラエルの伝統的信仰の下ではこの世に生きる意味を見いだせず、苦悶している伝道者をみます。かれは無意味にみえるこの世にあってもあえて生きることの意味を見出そうとしています。それは、神様に信頼と希望を置く信仰に由来するものです。どうぞ、私たちも、この伝道者の系譜に繋がる者として、主イエスに信頼と希望を置くものとさせて下さい。主の証人（あかしびと）として生きていくことが出来ますよう知恵と力と、そして勇気をお与えください。救い主、主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン）